

[別紙2]

審査の結果の要旨

氏名 李 久美

本研究は、失語症の言語モダリティ間の関係を明らかにするため、言語モダリティ間の関係についての仮説（Sidmanの仮説）を検証することを主目的としたが、これに先立って、失語症における漢字と仮名の成績について以下の結果を得ている。

1. 語症において差をきたす頻度は統計的に9.2-37.8%（modified Wald methodで95%の信頼区間）である。
2. 差を認めた場合は全て漢字の読解のほうが仮名の読解よりも良好であり、仮名の読解のほうが漢字の読解よりも良好であるものは認めなかった。このことは従来の失語症の単語の比較では漢字の読解のほうが仮名の読解よりも保たれやすいという説と一致していた。
3. 漢字の読解に比べ仮名の読解が有意に障害したのは左の側頭頭頂葉領域の損傷であることが示唆された。この損傷部位は従来日本語で言われている仮名の読みを障害する領域と一致していた。しかし、漢字と仮名の障害パターンと損傷部位の関係において二重乖離は示せなかった。

以上のことより、読みのメカニズムにおいて単純な漢字と仮名という区別は妥当ではないと結論し、漢字と仮名の両者をまとめて上に述べた仮説の検証を行い、以下の結果を得ている。

1. Sidmanの仮説1、2の両方の現象は失語症で障害されることがある。
2. 仮説1の現象を妨げる責任病巣は、左前頭葉白質病変であることが示された。そのメカニズムは、左の前頭葉白質病変が仮説1における読解の前提条件である二つのモダリティ、音

を聞いてそれに対応する絵の指示、音を聞いてそれに対応する字の指示、の統合を妨げるからではないかと考える。

3. 仮説2の現象を妨げる責任病巣は、左前中側頭葉から後側頭頭頂葉に及ぶ領域であることが示された。そのメカニズムはこの領域の損傷が仮説2における音読の前提条件である三つの言語モダリティ、音を聞いてそれに対応する絵の支持、音を聞いてそれに対応する字の指示、絵の呼称、の統合を妨げるからではないか、と考える。

以上、本論文は失語症の言語モダリティ間の関係において、読解と音読についてのSidmanの仮説が常には成立しないことと、Sidmanの仮説を成立させる現象に関わる脳の解剖学的基盤を明らかにした。本研究は、失語症についてはこれまでほとんど研究されてこなかった言語モダリティ間の関係について、その一部を明らかにすることで失語症のメカニズムの解明に重要な貢献をなすとともに機能訓練面にも重要な示唆を与えるものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。